

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2470300860		
法人名	(有)日本サポート・リンク		
事業所名	色えんびつ・鈴鹿		
所在地	三重県鈴鹿市下大久保町2290番地の12		
自己評価作成日	令和2年8月10日	評価結果市町提出日	令和2年11月5日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/24/index.php?action_kouhou_detail_022_kani=true&JigyouvoCd=2470300860-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	評価認証推進機構株式会社		
所在地	510-0947 三重県四日市市八王子町439-1		
訪問調査日	令和2年 9月 15日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

現在は、要介護1の利用者から要介護5の利用者がおられ、平均介護度は2.3となっている。介護度の差が大きく、その人その人に応じた支援を行っている。コロナ予防対策で、外出や面会の制限があり、施設内で過ごしているため、少しでも気分転換が図れるような楽しい行事を開催している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

鈴鹿山脈の麓畑に囲まれた広々とした土地に建つ平屋の一軒家である。「あなたらしく、いつまでも」のモットー通り、近所の畑道の散歩に行く人、畑仕事の好きな人には、トマト、キュウリ、等の夏野菜やさつま芋、玉葱作りを楽しんでもらっている。年間行事も盛りだくさんで、いちご狩りや紅葉狩りなど外へ出かける楽しみもある。家族の面会頻度も高く、訪問し易さを物語っている。月に一度施設から利用者家族宛てに送られてくる「たより」には一人一人の体調や生活の様子が担当者によって書かれつながりを大切にしている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らさせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念は、常に意識できるように、職員、利用者が目に入る共同スペースに掲示している。日頃から理念に添った支援を心がけている。	色えんぴつの名前の由来である、一人一人の色(個性)を認め「あなたらしくいつまでも」をモットーに、職員は利用者一人ひとりの生活パターンに合わせた介護に取り組みその人らしく毎日を過ごしてもらえるように努力している。	理念の具現化に向けてもう一步踏み込み、認知症支援の在り方に対する知識を更に深め、先回りの介護より自己選択を重視した支援の更なる実践に繋がりたい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	参加できる地域行事には毎年参加しているが、今年はコロナの影響でほぼ中止になった。毎日の散歩では、畑仕事をしている方や、保育園児等出会う人達とは挨拶を交わしている。	地域の自治会長との関係が密で、色えんぴつ鈴鹿の存在を地域へアピールして貰ったり地域行事への参加呼び掛けもして貰っている。また、災害時の協力約束も取り付けている。地域民生委員との交流もあり、利用者は散歩の途中でよく声掛けをして貰っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域に向けての発信はできていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1度開催している。会議では、施設の取り組みや近況状況を報告するとともに、その時々必要なテーマについて意見交換して、実践に繋げている。	コロナの為、市の方針で議事録の家族送付を以て開催とみなされる。近況報告や包括よりの情報提供に偏る為、家族に「意見・要望」のアンケートを取り回答する等、サービス向上に向けた工夫が見られる。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	広域連合、包括センターが相談窓口となっている。空床ができた時や困難事例、また必要な地域の情報を聞いてりしている。介護相談員はコロナの影響で中止となっている。	包括支援センターとは密に連絡を取り合い、月に一度は広域連合に出向き色々な事を相談している。鈴鹿市の「生き生きボランティア制度」や介護相談員の訪問を受け入れているが、現在はコロナの為中止している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	現在は玄関等施錠はしていない。身体拘束等の適正化の対策を検討する会を、3か月に1回開催しており、その都度必要な事を話し合っている。	職員全員で3か月に一度「身体拘束マニュアル」に沿って勉強会を行い、安全第一に最適な方法を模索している。ベランダから庭や畑の出入りは自由で、外へ出たがる利用者には常に目配りをして毎日一緒に近所を散歩するようにしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	今年はコロナの影響で研修が中止となっている。日頃の業務では、利用者の身体に不信な傷がないかを入浴時に観察したり、言葉使いに問題がないか注意をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	コロナの影響で研修等が中止となっている。内部研修も行っていない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際は、重要事項に添ってなるべくわかりやすい言葉で理解してもらえよう努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	コロナの影響で、外部からの面会や訪問は制限しているため意見交換等はできていない。	面会時には必ず声をかけ要望や意見を聞き、運営やケアに反映させるよう努めている。晩酌習慣の継続支援や、支援方法等、本人や家族の意見を本人本位に検討しケアに反映させている。コロナで家族の面会機会が無くなったので独自に家族にアンケートも取っている。	利用者近況の詳細な便りは、家族にとって安心材料となっている反面、問題行動や排せつの失敗の詳細の直接的な表現は家族への負い目となり本音の意見や要望を表出しにくくなる傾向がある為、表現上の工夫が望まれる。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日々の業務についての意見があれば、話し合いのもと実践できるようにしたり、必要な備品等の要望があれば応じている。	年1度の社長面談や毎月の会議の他にも、都度意見や提案を聞き、話しやすい雰囲気であることが職員調査から伺えた。管理者は個々の提案にカンファレンスを通して運営や支援に反映させている。職員関係が良く団結力が強い一方で、管理者の意図する課題が実現しづらい側面も見られた。	管理者は、理念の更なる具現化のためにも経営層に働きかけ、職員の認知症や支援の在り方に対する意識付けや学習会の機会を増やすことが期待される。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	毎月の会議の時に、職員からヒアリングを行っている。又、年1回の面談を通して、個々の話を聞いて、今後の目標などを明確にして、その推移をチェックして、給与などに反映させている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修に関しては、最低年間4回以上受けるように指導している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	積極的には交流の機会などを作っていないが、研修時に、他の同業者との交流を促している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	生活歴を聞いたり、本人の情報をできるだけ集めて、本人の望む事が把握できるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族との面談で、できる限り本人に対する思いを聞くよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	必要な支援があれば導入している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	一方的に介護をするのではなく、その日1日を共に過ごす姿勢を大事にしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族も行事に参加してもらったり、家に連れ帰ったり、外出や外食の支援の協力をしてもらっている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの人が訪ねてくる事はないが、住んでいた場所の話をしたり、写真を見ながら昔の事を思い出せるような会話を持つように努めている。	コロナ以前は、受診の行き帰りに町の名前や馴染みの人や場所の思い出話を聞いていた。今は写真や懐かしい絵と一緒に見て昔の思い出を引き出せるような会話で馴染みの記憶が途切れない様な支援をしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の相性に配慮して、出かける際の人選や、日頃の食事や団欒の際に座る席に気を配っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	必要に応じ相談、支援に努めているが、実際は亡くなられて終了になる場合が多い。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者様本位で、可能な限り、その日その日の要望に添った支援をしている。	家族の面会時や本人に聞き取った内容は、業務日誌に記録され共有され本人の状態に合わせて検討されている。食べ物の嗜好や利用者がやりたい事出来る事等その人らしく暮らせる様支援し、やりたがらない事は無理強いないようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	一人ひとりの情報がわかるファイルが、誰でも見られるところに置いてあり情報の共有ができるよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日一人ひとりに話掛けをしたり、自室で過ごしている方も定期的に訪室して様子観察をしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	家族や本人の要望を確認しながら、毎月のカンファレンスの場で、担当者からの意見等を聞いたり、職員間で相談して介護計画を作成している。	本人の現状を中心に、家族の意向や担当職員の意見を踏まえ、職員間で話し合い、車いすの人には自室で休む時間を取ったり、頑張る自立支援から心身に負担の少ない支援に変更したりと現状に即した「その人らしい」を支援する介護計画としている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	業務日誌やケース記録、申し送りを毎日行っていて、新しい気づきや必要な支援に繋げている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	施設でできる範囲で柔軟な支援に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域資源はあまり利用できていない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	受診が難しくなってきた利用者は、在宅医療に切り替え2週間に1回の往診で健康管理を行っている。	入所時に、かかりつけ医の説明をした上で本人や家族の意向を確認しており、全員が事業所のかかりつけ医となっている。毎月の一人ひとりの利用者家族に向けた「便り」で受診や投薬状況や結果を伝えている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	施設に看護師の配置はない。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院中は、定期的に様子を見に行ったり、早期の退院にむけて情報交換を行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所の際に終末期に望む治療を確認している。状態が変わった時には、その都度予後の相談をしながら、可能な限りで家族や本人の意向に沿った支援をしている。	入所時に、家族の意向を聞き事業所でできることやできないことを説明している。終末期での看取り例はないが、状況変化の都度家族やかかりつけ医と相談し、利用者にとって最善の方法がホームでの看取りとなった場合は、「看取り指針」に従い本人や家族の意向に沿った支援をしていく方針である。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	入所の際に急変時の意向を確認している。初期対応の周知と共に救急車要請時の鈴鹿市共通の情報共有シートを作成した。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的に、いろいろな想定のもと避難訓練を行っている。また非常用品、設備点検もしている。	設備点検や夜間想定を含め、通報、避難、消火等の防災訓練を、概ね年6回行っている。施設の性質上、避難所へは行かずにホームで完結できる様、設備や備蓄品の準備ができており、また地域協力として1～2名の地域高齢者を受け入れる準備もできている。	災害対応のマニュアルは作成済みであるが、現在作成中のどの職員でも素早く安全に利用者を避難させられるようなフローチャートの早期の完成が望まれる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者の尊厳を大切に、その人その人に応じた対応をしている。	呼称は基本苗字で、トイレ誘導時や入浴介助時には一人ひとりの性格にあわせて言葉かけを工夫している。トイレの失敗時は、他の利用者に分からないように対応支援し、その人のペースに合わせた介護や支援の努力をしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	要望を話しやすい環境作りや、声かけや会話をもって要望をくみ取るようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	居室で過ごしていたり、外が好きな人は庭で過ごしたりと一人ひとり自由に過ごしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	自己決定できない人以外は、各居室にタンスが置いてあり自由に決められる。美容師の訪問が2か月に1回あり、自分の好きなヘアスタイルにしてもらっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の片付けや盛り付け等できる事は一緒にしている。また、誕生日は本人の食べたい物を提供したり、行事の時は季節感のある料理を提供している。	職員が昼食の準備をする音や匂いを感じながら、お茶やレクをしている。食介をしない職員も食堂で持参した弁当を利用者と一緒に食べながら歓談している。家族からビールを預かり晩酌習慣の継続を支援して貰っている利用者もいる	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	水分は、1日を通し必要な量を摂取できるようにしている。お茶はいつでも自由に飲めるように準備している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	個々に応じたケアをしている。寝たきりの方は訪問歯科の診療を受けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりに応じた時間に、声かけや必要な介助をしたり、本人に合った排泄用品を使用している。なるべくオムツの使用を減らすよう工夫をしている。	「できるだけトイレで」を基本に、尿意や便意がない人、自立の人、それぞれに合った声掛け誘導や介助で昼間は殆どの利用者がトイレで排泄出来ている。失敗時も周りの人に分からない様対応し、利用者のトイレでの排せつの意欲をそがない様支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	なるべく薬を使わず自然排便ができるよう食べるものに注意をしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	1日おきには入浴できるよう曜日を決めているが、入りたい人、入りたくない人、皮膚の状態が悪い人等、その日その日で臨機応変に対応している。季節に合った入浴剤を使用している。	利用者が1日おきに入れるよう調整しており、毎日入りたい人や当日入りたくない人等の希望に沿うようにしている。拒否に対しては、日時や声掛けする職員や言葉がけ等を工夫しているが、無理強いはせず足浴や清拭で清潔を保つよう支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	ほとんどの利用者が自分のペースで寝たり起きたりしている。室温、湿度は職員が管理している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個人の服薬情報がわかりやすい場所においてある。また薬の説明書も見やすい場所においてある。薬剤師の訪問が月2回あり、不明な事は教えてもらったり助言を受けている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	リクレーションや職員との会話や日常の洗濯もの片付け、炊事等無理のない程度で行っている。夜間ビールを飲まれたり、希望があれば好きなものを食べられるようにしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	現在はコロナの影響で外出や面会、外部からの訪問は制限している。歩きたい人は、近所の畑道を散歩している。	職員と近所の畑道を毎日散歩する人や、ベランダから出て自由に庭の散歩を楽しむ人もいる。畑仕事や草取り、庭での歌やゲーム、流しそうめんや系列ホームと合同の芋掘り等、外気に触れる機会を多く作るようにしている。コロナ以前は、職員と精米に行ったり卵を買いに行ったりしていた。また家族との墓参や外泊を支援していた。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を常に所持している利用者がおられ、自主管理のもと近所のコンビニで自分の好きな物を買っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	用事があるときは電話をしたり、手紙のやり取りをしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	各部屋に表札を貼っている。季節の花を飾ったり、共同スペースの目立つところにホワイトボードがあり、その時々ので行事や催し事を表示している。自然の風が入るようにしたり居心地よく過ごせるよう心がけている。	庭や畑に続くベランダは解放され、窓からは風がよく通り明るく開放的である。対面式の台所で作業する職員からは利用者の様子がよく見え、お互いの安心感がある。廊下の壁には行事ごとの写真や職員と一緒に作った季節の作品が飾られ、見て楽しめるようにしてある。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共同空間では小さいスペースはなく一人になる事はできないが、一人ひとり椅子に座る位置は自然にほぼ定一となっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室は、家で使っていた家具を入れたり、写真や自分で作った制作物を掲示している。	自宅で使っていた馴染みの家具や飾りを持ち込んでもらい、住み良い環境を作るようにしている。ハンガーラック等のように動くものはなるべく置かず動線に気を付けている。部屋には大きな窓があり天気の良い日は布団を干し気持ち良く休めるようにしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	自分の部屋には表札が貼ってあり、トイレもわかりやすいよう表示がある。廊下は手すりの設置がある。また、歩行不安定な人には居室にセンサーを設置している。		